同鬼面風呂　古き形あれども、千家にては原叟好、香サマあり、淨味作始り也、釜は腰万字、灰カキ上ゲなり、

板風呂　利休小田原陣中にて好むといひ傳ふれども、千家にては元伯土齋へ好遣すが始りなり、杉木地塗上、五德なし透木、原叟は百佗を合す、初めに用ひし釜は不知也、

〔雍州府志七土產〕風爐　以銅鐵鑄之者釜屋製之、埏埴而造之者號土風爐、元南都宗善之所造爲上品、依之或號奈良風爐、有赤黑之二色、然赤者不及黑色、自琉球所來之知牟加羅風爐、是亦珍物也、

〔茶湯古事談三〕一むかし豐後の淺黃風爐と云有、是は豐後の屋形大友の好みにて、總四郎がやきし、專ら其頃はやりしが、火氣つよくあたれば、色替り見たてよろしからぬとて、後はすたりしとなん、

〔喫茶指掌編三〕天正十八年、豐臣殿下〇秀吉小田原御陣中にて、御茶可被遊とて、利休へ風呂を執寄よとの仰の時、利休申上しは、御陣屋にて奈良風呂の御執合いかゞ取合可申、風爐可申付やと伺しに、勝手にせよとの仰に付て、頓て箱風呂を製し上しに依て、夫にて御茶被成しと也、

何樣一通の御旅にても無御陣中の事なれば、殿下とは乍申、御平常の趣には違べし、〇略中今小田原風呂と人の唱は是也、又板風爐或は箱風爐ともいふなり、

同十五年、京北野大茶の湯御催の時、或佗人板風爐、旅箪笥などを儲なせし事有、左有ば全利休が物數寄に出しには不有とみえたり、〇略中

天正十五年にして其紋摸は開つれども、人敢て唱ず、利休其寸法を考正て、小田原にて出したるなど樣の事か、旅箪笥も斯樣にや有けん、〇略中板風呂は宗旦好、亦は庸軒など云は誤也、

〔槐記〕享保十一年五月九日、參候、カナ風爐ノ青ミアリテ見事ナル物也、コレハ昔勢多ノ橋再造ノ刻、ハラヒ物ニナリシ欄干ノギボウシ也、中井定覺ニ云付テ、取リテ久シク庭ニ捨置シガ、不圖思